

富大は3日、父親が積極的に育児に取り組むと、乳幼児期の子どものがが減る可能性があることが分かったと発表した。

富大エコチル調査富山ユニットセンターの島田佳奈子リサーチコーディネーターら研究グループ

富大研究グループ

プの調査によると、父親の育児行動の頻度が多い群では、少ない群と比べ、子どもの外傷発生が少なかった。

子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）に回答した7万2343人の母親の

乳幼児のががリスク減

回答に基づき、子どもの生後6カ月時における父親の育児行動と、生後から4歳時点までに発生した受診を要するレベルの子どものが（外傷、熱傷）との関連を調べた。

室内遊び・外遊び・子どもの食事の世話・おむつ交換・衣服の着脱・入浴の世話・寝かしつけの7項目について、「いつもする」「ときどきする」「ほとんどしない」「まったくしない」の中から回答してもらい、点数

化。点数の高いグループの子どもは低いグループの子どもに比べ、がの発生率が1割ほど低かった。熱傷との関連性は見られなかった。

父親の育児行動が子どもの外傷の発生リスクを減らす要因について、研究グループは「父親は子どもの行動に注視しながら世話をしており、子どもの未熟な危険予知力をカバーしているためと考えられる」などとしている。

父親の育児積極参加